



Title	日本近代における日本漢文学史論
Author(s)	沈, 日中
Citation	(2018-03-20)
Issue Date	2018-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/38038
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-19T13:05:12Z

日本近代における日本漢文学史論

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

沈 日中

論文内容の要旨

本稿は主に芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の学術生涯、日本漢文学史に関する著書や論述の面から、それぞれ三者の日本漢文学史論について論考してきた。日本漢文学史論として、日本漢文学に対する定義、時代区分論、日本漢文学の各盛期を代表する漢文学者などの側面から、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学史に関する論述の特質とは何か、ということを究明してきた。

序章では、中国大学において、日本語学科の教育は言語、翻訳、現代文学の講読、日本文化概論の講義を重視する。日本言語文学を教育研究しようとするれば、日本の古代から近世にかけての文学を論考しなければならない。しかし、中国の日本語学科の現状を精査すると、日本文学史の教科書と研究があつたにしても、不備であると指摘した。日本の漢文学は中国文学の影響を受け入れながら、日本漢文学独自の発展を成し遂げてきたものである。本論の探求しようとする内容は芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学史論とした。本研究の位置付けとしては、近代日本における日本漢文学史論を以て、『日本漢文学史』を編集して、中国大学の日本語科学生あるいは日本学研究界に真の『日本漢文学史』を紹介することである。

第一章では、芳賀矢一の『日本漢文学史』を論考する動機と目的を指摘したうえで、芳賀矢一の日本漢文学史論をまとめた。芳賀矢一の日本漢文学史も日本文学史の一部であるという日本漢文学史に対する定義に基づき、「上古は日本漢文学の曙光」、「平安時代は漢文学の第一盛期」、「近古は僧侶の漢文が牛耳る」、「近世：漢文学の第二盛期」という時代区分論をまとめた。

第二章では、岡田正之の『近江奈良朝の漢文学』および『日本漢文学史』について考察を行った。岡田正之の日本漢文学史に関する論述を踏まえ、①推古朝は漢文の諸文体が備えた、②懐風藻は古詩の精髓である新文学、③万葉集は漢文学の精髓、④奈良朝は漢文学の少壮期、⑤平安朝前期は漢文学の強盛期、⑥平安朝後期は漢文学の老衰期、⑦鎌倉時代は平安朝と南北朝の架け橋、⑧南北朝・室町時代は詩文の格は王朝を凌駕し、徳川時代の文運を促すといった岡田正之の日本漢文学史論が考えられた。

第三章では、神田喜一郎の日本漢文学史論を論考した。神田喜一郎は日本の漢文学に対

し、漢文学の黎明期、奈良朝の漢文学、平安朝の漢文学、五山文学、江戸時代の漢文学、漢文学の衰滅など六つの時期に分けた。神田喜一郎は従来の研究者と違って、特に日本漢文学の黎明期、三つの盛期、日本漢文学の衰滅に関する区分が自ら独特なところがあると考えられた。飛鳥時代に至っても漢文学の素養が、純文学的な作品を生み出すまでにはまだ成熟していなかったという理由で、神田喜一郎は飛鳥時代がただ漢文学の黎明期であり、明治維新以後の日本の漢文学は衰滅の一路を辿ったと断定する従来の研究者は少なくないが、神田喜一郎はそれが大きな誤りだと考えられた。

終章では、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学に関する論述を整理し、考証などを行い、以下のことを究明した。

(一) 日本漢文学とは何か。本論は芳賀矢一の日本漢文学史を日本文学史の一部とすることと神田喜一郎の言っている「日本の漢文学」の「二重性格」により、日本の漢文学に対する正しい捉え方としては、日本文学の一環として取り扱いながら、中国文学の支流として扱うことである。つまり、日本漢文学を扱うには、その「二重性格」即ち「二面性」を重要視しなければならない。

(二) 時代区分から見る日本漢文学史論とは何か。芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学史に関する時代区分論に基づき、本論は日本漢文学史論とは飛鳥時代が漢文学の黎明期、奈良時代が漢文学の少壮期、平安時代が漢文学の第一盛期、五山文学時代が漢文学の第二盛期、江戸時代が漢文学の第三盛期、明治時代が漢文学の衰滅期ではないという六つの発展時期、及び平安前期、五山時代の南北朝時代、江戸時代の第二期即ち元禄元年(1688)～安永末(1780)という三つの盛期である。

(三) 日本漢文学の独自の発展。日本の漢文学は中国文学からの影響を受けながら、日本という本土において、独自の発展を迎えた。その中には、空海の漢文学作品である『文鏡秘府論』と『性靈集』、五山禅僧の漢文学は日本漢文学の独自の発展の結果であると言えるのであろう。また、五山文学時代において、五山禅僧の手により、中国宋元より新しい文明をもたらして、五山文学の隆盛を促す一方、後の徳川時代の漢文学のために、基礎を作っておいた。これまでの日本の漢文学が宮廷中心のものであったのを、新しく禅林中心のものに変化したことも、日本の漢文学の歴史の上に大きな変革をもたらしたものと言わなければならない。禅僧を中心とし、漢文学発展史上の重要な時代を担って立ったのは世界文学史の上においても、特殊的な存在であると考えられた。